

小規模校の良さを活かした体育の授業に関する基礎的研究
—ある島の小学校の教師を対象としたアンケート調査を手がかりとして—

The basic study of physical education
at small school which provides a merit
—Elementary school teacher in an island as an object—

池 田 光 功 *

Teruyoshi IKEDA

* 福岡教育大学保健体育講座非常勤

宮 田 正 和 **

Masakazu MIYATA

** 福岡教育大学保健管理センター

岡 村 輝 一 ***

Teruichi OKAMURA

*** 仙台大学体育学部

平 田 哲 史 ****

Tetsushi HIRATA

**** 福岡教育大学保健体育講座

(平成23年8月19日受理)

Abstract

The purpose of this study on physical education is to plan lesson of the physical education at small school. The method of this study is to survey the elementary school teachers' opinion at small school in an island. The results and views are as follows. The basic lesson of physical education has a relationship between play and exercise. Enjoying exercise is ideal and important for mental and body growth. The lesson of physical education at small school is asked to create the class in details. To consider the rule change as long as to know the difference strength and skill of each student. Merits of physical education at small school is being able to pay attention to each student and teach them well. To utilize the benefit at small school, student can have an opportunity to show their talent by playing and enjoying the game. Paying attentions to each student are also important for their safety measure. It is difficult to apply the same lesson of physical education at the small school to the bigger school. However, it is useful to apply the lesson which is based on students' ability. It is possible to gain the big pleasure even at small physical education class. It is possible to apply the lesson of physical education to different school size and condition.

Keywords: small school, elementary school, combination lesson.

キーワード: 小規模校, 小学校, 合同授業.

1 はじめに

体育・スポーツの研究には、運動する人と、それを指導する人を対象とした研究領域があり、学校の体育であれば、児童生徒と教師という関係が成り立つであろう。さらに、それは施設用具を含めて構成されているものと考えられる。

さて、教師の立場からそれらを見た場合、児童生徒が少ない中で体育の授業を実施すること、あるいは、施設用具があまりそろっていない場合での授業ではどのように授業を実施すればよいのかとの疑問がわき、これらのことについて現場の教師はどう克服しているかということに関心を持ち、研究として取り上げることにした。

研究テーマとして推し進める理由として、体育の授業では「工夫」という観点が随所に見られることが考えられるからである。正規のルールに定める人数に寄らなくても、施設や用具に多くを頼ることはなくとも、工夫しだいで体育の授業は大きく変わることが考えられ、これを調査研究して行くためには、小規模校を対象とすることで明らかになると考えられる。さらに、小規模校における教師の意見や考え、経験などから広く学ぶ必要があると考えられる。

それは、大規模校や都市部の学校においても、班別学習や個々の能力に応じた体育の授業づくりが必要であり、児童生徒自らが興味関心を持って、積極的に授業に取り組むことができる場や環境づくりとしての支援も必要であると考えられ、大規模校や都市部の教師として実践力を発揮することができるよう、小規模校で指導にあたっている教師の経験や存在は大きいことが考えられる。なぜなら、大規模校や都市部の学校のみを基軸とした指導方法だけでは、その地域の特色や良さを活かした体育の授業が実施できない懸念もある。また、教師としての工夫や豊かな発想が浮かぶ機会も少なくなることが考えられる。

本研究では小規模校に着目し、それを活かした体育の授業づくりの実際を調査検討したものである。そのためには小規模校の良さを認識し、引き出すことが肝要であると考えて調査研究を行った。そして、本研究から得られたことを活かし、体育科教育の指導方法に役立てることができるよう、体育の授業工夫に発展させ、教師を目指して行く大学生らに指導して行くことで、今後の体育の授業工夫のあり方を構築したいと考えた。

小規模校の体育の授業に関する先行研究として、古川ら⁶⁾は、複式や合同による体育授業での異学

年の児童に対する有効な教師の関わり方を明らかにして行くために、授業場面の観察法や授業評価などを用いて、ボール運動の授業分析を試み、個人差のみならず学年差を考慮して指導する必要性などを示唆している。丸山ら¹⁰⁾は、離島複式学級における体育授業の課題を調査し、学年差や体力差で児童の序列等ができあがり、少人数であるため競争心の発揚などを課題として挙げている。三浦ら¹⁴⁾は、小規模小学校における地域や学校の特性を生かしたこれからの学校体育のあり方を検討し、学校行事、体育的行事に力を入れていることの背景には、地域の特色とともに、小規模校であるがゆえの良さを十分に発揮した学習指導計画とその内容になっていることに注目している。これらの先行研究により、小規模校の体育を研究したものは多岐に及ぶが、本研究は、その良さに関することを発掘し認識するため、実際に小規模校に勤務する教師の意見や考えを聞くことを中心にした基礎的研究である。

2 研究対象及び方法

X市とY大学らの市民交流事業の一環として、子どもたちの箱庭療法（砂の入った箱に玩具をならべて箱庭を創作する）を実施している筆者らは、依頼に基づき、2010年9月、その島を初めて訪れ、子どもたちとふれ合った。島は、周囲約10km、人口約200人の漁村で、本土から市営の船で10分あまりの距離にある。筆者らは、それを機会として島へ10数回ほど足を運び、島に一つある小学校の教師を対象に研究を実施することにした。

本小学校（以下、本校）の規模として、児童数は10人強であり、教職員（管理職、事務職を含む）も10人ほどであった（2010年現在）。なお、法律（へき地教育振興法⁷⁾）に基づく支援があることが考えられ、体育用具やプール、体育館などの施設は十分に整備されていることが伺われた。

研究方法として、無記名自記式アンケート調査を実施し、5人の教師から回答が得られ、得られた回答結果を分析し考察した。アンケートの回答より得られた、対象とした教師の基礎データを表1に示した。対象とした教師には、豊富な体育の授業経験を持つ教師も含まれ、また、本校では直接的には体育の授業は行わないが、合同授業でのサポートや運動会などの学校行事に大きく携わっている教師も含まれていた。アンケート調査の質問項目と選択肢については表2に示した。調査の実施に際しては、研究の趣旨や内容についての同

意を得た上、2011年2月下旬に教師一人ひとりに配付し、同年3月上旬、本校において直接回収した。

表 1 対象とした教師の基礎データ (n = 5)

	平均値±標準偏差
教 師 歴	19.8±14.7年
本校において	2.2±0.8年
小規模校(本校を含む)において	6.2±5.4年
都市部において	13.6±11.4年

表 2 アンケート調査の質問項目 (2011 池田・宮田 他)

<p>質問A 体育の授業を実践して行く上で、以下の3つのことを質問しますので、あてはまる選択肢を一つだけ○で囲んでください。</p> <p>①「遊び」と「運動」は関連性があると思う。 < 1. 思う 2. 多少思う 3. あまり思わない 4. 思わない ></p> <p>② 楽しく“からだ”を動かすことで健康や体力を育成することができれば良いと思う。 < 1. 思う 2. 多少思う 3. あまり思わない 4. 思わない ></p> <p>③ 体育の授業から仲間を思いやる心や挑戦する気持ち、または規律などを学ばせるのも目的の一つだと思う。 < 1. 思う 2. 多少思う 3. あまり思わない 4. 思わない ></p>
<p>質問B 小規模校(本校の場合)の体育の授業に関して、複式の指導形態や全校一斉などの形態について、以下の3つのことを質問しますので、あてはまる選択肢を一つだけ○で囲んでください。また、その選択肢を回答した理由などについても質問させていただきます。</p> <p>① 個々の児童の健康や体力に配慮した授業づくりを工夫するためには、ルールの変更や環境、場の設定などを考案し、児童に提供して行く必要があると思う。 < 1. 思う 2. 多少思う 3. あまり思わない 4. 思わない ></p> <p>※上記の質問について、その選択肢を回答した理由や、ルールの変更や環境、場の設定を必要とする単元や授業場面など、思い当たることがあれば記述をお願いします。</p> <p>② 児童の学年差や性差をはじめとする体力や技術力に関する差を授業では考慮して行く必要があると思う。 < 1. 思う 2. 多少思う 3. あまり思わない 4. 思わない ></p> <p>※上記の質問について、その選択肢を回答した理由や、そのことに該当する単元や授業場面など、思い当たることがあれば記述をお願いします。</p> <p>③ 児童らは、学年などの枠を越えてチームワークやコミュニケーション力に優れていると思う。 < 1. 思う 2. 多少思う 3. あまり思わない 4. 思わない ></p> <p>※上記の質問について、その選択肢を回答した理由や、複式授業や全校一斉授業にて、チームワークやコミュニケーションを必要とする単元や授業場面は、どのような時であるかなど思い当たることがあれば記述をお願いします。</p>
<p>質問C 小規模校(本校の場合)の体育の授業に関して、少人数を対象とした授業の良さについて、以下の4つのことを質問しますので、あてはまる選択肢を一つだけ○で囲んでください。また、その選択肢を回答した理由などについても質問させていただきます。</p> <p>① 授業を実践した感じでは、指導上のやりやすさを上げることができると思う。 < 1. 思う 2. 多少思う 3. あまり思わない 4. 思わない ></p> <p>※上記の質問について、その選択肢を回答した理由や、そのことがよく表れている授業場面など、思い当たることがあれば記述をお願いします。</p> <p>② 児童らは教師の指導や指示を理解し、すばやく行動することができていると思う。 < 1. 思う 2. 多少思う 3. あまり思わない 4. 思わない ></p> <p>※上記の質問について、その選択肢を回答した理由や、そのことがよく表れている授業場面など、思い当たることがあれば記述をお願いします。</p> <p>③ 専門性の高い単元(水泳や器械運動など)の授業では、安全面での指導及び指示が行き届きやすいと思う。 < 1. 思う 2. 多少思う 3. あまり思わない 4. 思わない ></p> <p>※上記の質問について、その選択肢を回答した理由や、そのことがよく表れている授業場面など、思い当たることがあれば記述をお願いします。</p> <p>④ 小規模校の良さ(本校の場合)を活かした体育の授業方法を、ある一部分については都市部の学校でも活用できると思う。 < 1. 思う 2. 多少思う 3. あまり思わない 4. 思わない ></p> <p>※上記の質問について、その選択肢を回答した理由や、ある一部分を活用できる場所があれば記述をお願いします。</p>

3 結果及び考察

質問A 体育の授業を実践して行く上で、以下の3つのことを質問しますので、あてはまる選択肢を一つだけ○で囲んでください。

質問A-① 「遊び」と「運動」は関連性があると思う。

上記の質問について、対象とした教師の5人すべてが「思う」と回答した。

質問A-①の結果に対する考察として、児童が元気に校庭で遊び、野山や砂浜を駆け回り、遊びを通した運動をすることの重要性を示していると考えられる。これについては、机について学習する集中力や柔軟な思考力にも好影響を及ぼすと考えられ、これまでの教師経験に照らし合わせた回答ではないかと考えられる。深代⁵⁾による、子どもの頃の体験をもとにした、発育期に育むことに関する報告では、日が暮れるまでスター選手になりきって野球で遊び、9人制でやるわけではなく、三角ベースであったり、投手と打者だけであったり、一人だけならば土手を目標に練習をし、自分で工夫していた、そして、遊びを通した身のこなしの経験がスポーツ好きという基盤を作り、一度動作を覚えると、神経・筋パターンができることを述べている。つまり、子どもの遊びが生涯において、いかに大切かということを示唆したものである。伊藤ら⁹⁾は、遊びのとらえ方を大人に管理されない子どもの自由な活動であり、身体を働かせるような遊戯的活動ととらえ、視聴、読む、話す、少年団やスポーツクラブ等は遊びに入れず、遊びの分類として、運動遊びや自然遊び、伝承遊びなどを挙げた。よって勉強ばかりの張り詰めた緊張感では、学校生活に支障をきたすことが考えられ、遊ぶことの重要性とは、運動することでストレスなどを解きほぐす作用もあると考えられる。そして、その遊びとはからだ全体を使った運動が適していると考え、「遊び」と「運動」が密接な関連性があると考えて回答したと考えられる。藤本³⁾による、離島の子どもの体格と体力を調査した研究では、子どもの遊びの種類が少ないことは、島の立地条件にあることも報告している。高萩¹⁸⁾は、遊べない離島の子どもの達として、背後に大自然を背負っているにも関わらず、子どもが少ないために身体的な集団遊びができず、たとえば、ドッジボールではよけられずに容易に当たってしまうことを報告している。しかし、本校の場合、竹馬

で遊び、一輪車に乗り（運動会での発表がある）、給食後の時間を活用した「みんなであそぼう」の時間では、鬼ごっこやキックベースボールをして力いっぱい遊んでいる。これは、教師による遊ぶ時間を作り出す工夫と努力によるものと考えられる。学校を取り巻く環境は、大規模校であっても小規模校であっても、地域の方々や保護者らの協力が必要であることは明らかである。とりわけ、体育に関しては、運動会や遠足などの学校行事での活かし方を教師、地域、保護者らの連携で作り上げ、授業を活性化させることにつながる考えられる。

質問A-② 楽しく“からだ”を動かすことで健康や体力を育成することができれば良いと思う。

上記の質問について、対象とした教師のうち3人が「思う」と回答し、1人が「多少思う」と回答、1人は「思わない」と回答した。

質問A-②の結果に対する考察として、体育の授業実践では、楽しい授業を構成して行くことで、健康や体力を育成することができればよいのではないかという、希望的な観測も込めて回答したことも考えられる。やはり、楽しい、おもしろいという観点が授業の根本になれば児童を引き付けることは難しいことが考えられる。児童の関心を引き付けるようにするためには、教材研究に一層の努力と工夫が必要となることが考えられる。藤田ら⁴⁾による、離島と都市部の中学生の体育授業における動機づけに関する報告では、離島及び都市部にかかわらず、生徒が取り組んでみたいと思うような課題を提供することや運動ができていることを実感させる指導を行うことで、自律性の高い動機づけが育まれ、体育授業以外でも運動を継続したいと思うようになることが考えられると考察している。三浦ら¹²⁾によれば、小規模校の利点をより生かしながら、児童一人ひとりに自主性や自発性など自ら発芽させる力の育成を重視するとともにこれを内発的動機づけととらえることも必要であると報告している。すなわち、これらの報告からも、健康と体力は人間が生きる根幹であることが考えられ、自主的に体を動かし、からだづくりができる子どもを育てるためにも、体育の担う役割は大きいといえることが考えられる。そのためには、より一層、授業に工夫を施すために、さまざまな観点を踏まえて、楽しいという構成を

折り込むことが必要であると考えられる。しかし、「思わない」という回答もあったことから、楽しいだけが体育ではなく、あくまでも教育の一貫としての体育であり、厳しいことなども乗り越えることができる心身の力の鍛錬と育成という大きな役目もあることが考えられた。

質問A-③ 体育の授業から仲間を思いやる心や挑戦する気持ち、または規律などを学ばせるのも目的の一つだと思う。

上記の質問について、対象とした教師の5人すべてが「思う」と回答した。

質問A-③の結果に対する考察として、体育の授業効果に、大いに期待を寄せていることが考えられた。たとえば、集団競技では、児童一人ひとりが上手くなるように努力し、チームとして結束して行くチームワークの大切さを学び、仲間を励まし、相手の立場になって思いやる気持ちが養われるのではないかと考えて、回答したことが考えられる。そして、体育用具や教材など「モノ」を大切に作る心、挨拶や礼儀などコミュニケーション力も体育の授業で高めて行くことができることが考えられる。宮崎¹⁶⁾は、離島教育への提言及び可能性について、学校と地域の融合教育の推進と国際化の中で通用する人材を育てるには、子どもの個性と地域の多様性を活かす教育環境を整備することが第一であると述べている。その意味においても、繰り返しになるが、運動会などをはじめとする学校行事と連携した体育の役割は大きく、特に、社会に必要となるコミュニケーション力の習得や決まりごとを遵守する機会を体育の授業において期待を寄せていることが考えられる。

上記による、質問A-①～③の回答は、大規模校、小規模校を問わず、体育の授業を実践して行く基本的な指導観であることが考えられる。3つの質問の回答をまとめると、遊びと運動は密接な関連性が考えられ、それは学習意欲の向上に期待されるものと考えられる。ものごとに集中し考えることは、粘り強く、投げ出すことのないチャレンジ精神を育くみ、からだを使った遊びから、汗を流し得た豊かな感動から柔軟性に富んだ発想もわいてくるものと考えられる。そして、楽しく“からだ”を動かすことで人間が生きるための根幹である健康や体力を育成することが重要と考えられる。しかし、あくまでも教育の一貫としての体育であることから、厳しいことも乗り越えるこ

とができる「こころとからだ」の成長に努めることも重要であると考えられる。さらに、個々の努力から集団競技としての成立を生み、仲間を助け、思いやる心を育て、コミュニケーション力も体育の授業を通じて高めて行くことができると考えられた。

質問B 小規模校（本校の場合）の体育の授業に関して、複式の指導形態や全校一斉などの形態について、以下の3つのことを質問しますので、あてはまる選択肢を一つだけ○で囲んでください。また、その選択肢を回答した理由などについても質問させていただきます。

質問B-① 個々の児童の健康や体力に配慮した授業づくりを工夫するためには、ルールの変更や環境、場の設定などを考案し、児童に提供して行く必要があると思う。

上記の質問について、対象とした教師の5人すべてが「思う」と回答した。

なお、その選択肢を回答した理由や、ルールの変更や環境、場の設定を必要とする単元や授業場面などについて、思い当たることがあれば記述を依頼し、その内容をまとめて以下に要約した。

工夫という観点から体育の授業において、みんなで協力し、助け合いながら上手に関わることができるようにすべきである。これについては、実施する種目によって学年の組み合わせを考慮して行かねばならない。たとえば、サッカーあそびでは、少人数のため、普通の試合形式に限界もあることから、児童をどのような役割（シュートを放つのか、ゴールを守るのか）として試合の構成に参加させるか難しいと感じている。もちろん、児童それぞれに得意な種目もあるだろうが、苦手なことがあるのも事実で、これらを克服していくためにも、環境や場の設定を整えることは、技能の向上とともに意欲をかき立てることにともつながり、やる気にさせるという点では重要である。などの記述があった。

上記に対する考察として、ルールの変更や環境、場の設定について、チーム構成の変更による方法だけではなく、フィールドの規格からゴールの数、ボールの硬さやサイズなど細部に至る配慮が必要であると考えられる。そこから、試合などを通して、競技本来の持つ醍醐味に浸らせることが必要であると考えられる。そのためには、教師は子どもたちができることと、できないことを見極める

目を持たなくてはならないと考えられる。できている場合には、さらなる技術向上に向けた努力ができるような指導をし、できていない時は、原点に立ち返り、その種目の持っている楽しさやおもしろさを伝えるような工夫を実施することが考えられる。丸山ら¹¹⁾による、複式学級における体育授業の展開についての工夫の視点として、一回の授業で運動量の多い教材と少ないものを組み合わせるなど、意識的に身体を動かす構成を提案している。このことを背景として、具体的には、技術向上のために映像を活用して、目で捉える学習などを実施すること、さらには、地域で活躍している子どもたちに身近なスポーツ選手をゲストティーチャーとして招聘するなどの工夫も考えられる。そして、これらのことを一つの工夫として、授業の内容をより充実したものとするすることで、体育の授業そのものを有効に活用していくことが考えられる。

質問B-② 児童の学年差や性差をはじめとする体力や技術力に関する差を授業では考慮して行く必要があると思う。

上記の質問について、対象とした教師の5人すべてが「思う」と回答した。

なお、その選択肢を回答した理由や、そのことに該当する単元や授業場面など、思い当たることがあれば記述を依頼し、その内容をまとめて以下に要約した。

学年差や性差、体力、技術力の差が表れる授業場面がボール運動である。特に、合同で1年生から6年生まで実施する際に、それに応じて行く必要があるが、そのボール運動の種目や特性などで異なるものでもある。差に関しては、体力や技術力の差を授業の場面で活かしていくという考え方もある。たとえば、上級の学年が下級生に教えるようにする方法などがある。また、チーム編成に工夫を加え、男女別に授業することも一例である。さらに、合同授業の男女共習で実施する場合でも、低学年や女子児童にもパスを回すなどしたルール上の工夫を実施し、活躍の機会を与える配慮が必要である。などの記述があった。

上記に対する考察として、差を解消することばかりではなく、体育の授業を通して、それぞれの違いを理解し合おうという考え方に基づいて、子ども同士がお互いを認め合い、尊重することができる教育的な発展につながることでけれ

ばよいと考えられる。有馬²⁾は、地域を生かした教育、小規模だからできる教育、複式学級ならではの教育の実践こそ大切にすべきことであると述べている。そこで、前述したような、お互いを認め合い、尊重することができるような教育のあり方を実践することができるのではないかと考えられた。そのためには、教師からの言葉かけや指導として、体力の無いことは恥ずかしいことではないこと、できないことはおかしいことではないこと、できないからこそ努力する大切さ、お互いが助け合い協力し合うことの大切さを教え学ばせることができると考えられる。三浦ら¹³⁾による、小規模中学校を対象としたサッカー授業の工夫に関する報告では、男女共習において、比較的低学年の女子が消極的になることがあるため、シュートを支えるアシストの重要性を理解させ、その力がチーム全体の力として発揮されるように工夫していくことを述べている。それらのことから、教師として授業に深く関わって行くためには、さまざまな場面での適切な配慮が必要であると考えられる。さらに、これらの差は必ずしも児童らに負の影響を及ぼすことにはならないと考えられ、それらのことを児童生徒にわかりやすく理解させることも教師にとって必要なことであると考えられる。

質問B-③ 児童らは、学年などの枠を越えてチームワークやコミュニケーション力に優れていると思う。

上記の質問について、対象とした教師のうち1人が「思う」と回答し、4人が「多少思う」と回答した。

なお、その選択肢を回答した理由や、複式授業や全校一斉授業にて、チームワークやコミュニケーションを必要とする単元や授業場面は、どのような時であるかなど思い当たることがあれば記述を依頼し、その内容をまとめて以下に要約した。

勝敗がある種目については、リレーやボールゲームで作戦を考えている場面が見られる。「がんばれ」など声をかけ合い、低学年の児童に対して活躍の場を与えて励ましも見られることから、チームワークの一面も確認されている。体育の集団競技でのチームワークやコミュニケーション力に努力目標を置かざるを得ないとは一方では思うこともある。しかし、体育の授業だけではなく、遊びの場面でチームワークやコミュニケーションを伴い

ながら良く工夫している。それは、島に住む人たちも参加する運動会を成功させるべく児童の協力でそれが表れている。などの記述があった。

上記に対する考察として、学年などの枠を越えたチームワークやコミュニケーション力に関して、石倉⁸⁾による、少人数教育の良さに目を向けた報告として、児童生徒の個性や能力に応じた指導がしやすい、小回りが利き一貫した指導体制ができ、異学年間交流や協力授業がしやすく、自己を表現する機会や場が多く持て、体験的活動や問題解決学習がしやすく、地域素材等を生かした総合的な学習がしやすいことなどを提言している。これらのことについて、本校では、海での体験実習や祭礼、または全島運動会をはじめ、文化祭では児童の特技や楽器などを活用した発表会、その他にも将来の夢や目標を発表する場も設けられている。このことから、大規模校よりもはるかに自己を表現する機会が多く、他者とのコミュニケーションを取る機会も多いと考えられる。つまり、小規模校における体育の授業では、他学年と合同で実施しなければ成立することが難しい現実があることから、他者のことを自然と知るようになって行くことが考えられる。また、体育以外の授業でも交流することも多いため、コミュニケーションを特別に意識しなくとも、日常生活の中において、それは養われて行くことが考えられる。小河ら¹⁰⁾による、へき地、複式校の現状と課題への取り組みとして、人間関係や序列の固定化など、特にコミュニケーションに関する課題に直面することも多いことから、どのような方法をもって多様な人との関わりを意識した学習活動を展開するのかに向けた試行錯誤を始めたことを述べている。これらのことから、子ども同士の小さな限られたコミュニティだけでは新しい発見があまり見られないことから、さらなる工夫が必要であると考えられる。そのため、大人を交えた交流を実施することで、そのコミュニティの中において、子どもが自然と大人の世界の規範や社会性を学んで行くことの有効性が考えられる。これらのことから、チームワークやコミュニケーションについて、どちらかといえば、都市部の大規模校の児童より、大人の交流に近い形であることが考えられる。そして、そのことが地域の特性を活かした教育ということにつながり、子どもから大人へと成長させることができる一つの教育のあり方が形づくられていくことが考えられる。核家族化していく都市部においても、伝統や文化、風習などの行事等を通じて大人から子どもへ教え伝え

ていくことがあると考えられ、それらのことを体育の授業で実践できるように工夫していくことで、新しいコミュニティが生まれ、また、コミュニケーション力も同時に高められていく方法が考えられる。

質問C 小規模校（本校の場合）の体育の授業に関して、少人数を対象とした授業の良さについて、以下の4つのことを質問しますので、あてはまる選択肢を一つだけ○で囲んでください。また、その選択肢を回答した理由などについても質問させていただきます。

質問C-① 授業を実践した感じでは、指導上のやりやすさを挙げるができると思う。

上記の質問について、対象とした教師のうち1人が「多少思う」と回答し、4人が「あまり思わない」と回答した。

なお、その選択肢を回答した理由や、そのことがよく表れている授業場面など、思い当たることがあれば記述を依頼し、その内容をまとめて以下に要約した。

団体で実施する球技を体育の授業で行うことは難しいと感じている。それは、合同で実施することから、高学年の児童は低学年の力に合わせるため、全力を出して体を動かすことができにくく、一般的に持っている学年に相応する力を発揮することが難しい。体育の授業以外では、他の学年ともやっているが、これが授業を実践するとなるとやりづらさも感じている。しかし、授業では一人ひとりにはよく目が届くという利点もある。などの記述があった。

上記に対する考察として、小規模校の体育の授業での良さは、やはり児童一人ひとりに目が良く行き届くということが最大の利点であると考えられる。このことについて、大規模校と比較すると、教師が児童一人ひとりにふれ合い、指導する時間が多いことが考えられる。回答によれば、集団で実施する球技等の指導に悩んでいる教師も見受けられる。また、子どもたち同士にしても、それぞれの子どもが持っている体力等を常より把握しているためか、思い切り、精一杯の力を出すことに遠慮気味になっていることが考えられる。荒木¹⁾による、小さな学校で複式授業を実施しなければならないことを背景とした実践研究によれば、体育の教科に関しては、子どもたちの意欲との結合であって、体育の成果は具体的に目に見えると

いう特徴があることから、第一に教える中身を明らかにすること、第二に教える順序をハッキリすること、第三に中身をきちんと教えることを挙げ、これについては、教師も子どもも納得して上手くなるまで教えることなどを、その学校の教師らと考えまとめたものを報告した。そこで、上述した利点を活かした、体育の授業のあり方を構築して行くためには、本来の試合形式を小さなゲームとする工夫（コート規格、プレーヤーの数）や、技術の向上に大きく時間を作ることも可能であることが考えられる。もちろん、試合等を実施することも大切であることが考えられ、その競技の特性や醍醐味をたっぷりと味合わせることも必要であると考えられる。そして、教師も参加する授業形式を実施することで、やさしいパスなどを児童に渡すことがより可能となることが考えられ、そのことは、児童の活躍の機会を増やし、技術の向上を試しながら実践して行くことで、小規模校の体育の授業における一つのあり方が形づくられると考えられる。

質問C-② 児童らは教師の指導や指示を理解し、すばやく行動することができていると思う。

上記の質問について、対象とした教師のうち3人が「思う」と回答し、2人が「多少思う」と回答した。

なお、その選択肢を回答した理由や、そのことがよく表れている授業場面など、思い当たることがあれば記述を依頼し、その内容をまとめて以下に要約した。

高学年の児童がすばやく行動することで、手本になることができ、上級生が下級生に教えるという効果がある。また、子どもたちは理解する力を持っているため、教師の指導や指示通りに協力し合いながら行動することができている。それは、教師の目が児童に行き届くからである。などの記述があった。

上記に対する考察として、高学年の児童が手本となり、下級生を教える効果について、吉田ら²⁰⁾は、離島における教育現場の現状を小中併置校の場合とした報告によると、日常生活全般において発達段階の上の子どもから自然に学ぶ機会が多く設けてあり、大きくなったら僕も私もお兄さんお姉さんのようになるというモデリング的感情が芽生え、小さい発達段階の子どもにとって良い教育効果をもたらし、発達段階の大きい子どもは、

手本となることを自覚し、意欲的に取り組ませる要因となっている考えを報告した。これらのことを理由の一つとして、高学年の児童が手本となりうる姿から、すばやく行動していることが考えられる。また、前項の質問に関連することで、教師の目が児童一人ひとりに行き届くことにより、児童らの行動に、すばやく行動するきっかけを与えていることも考えられる。そのことについては、少人数という児童数から空間的な認知を教師も児童もお互いが認識していることが考えられる。つまり、教師から児童はよく見えるが、児童からも教師の指示や姿がよく見えることに大きな効果があることが考えられる。田原迫¹⁷⁾による、へき地学校の研究調査によれば、教師と子どもの関係はきわめて親密であると報告している。そこで、教師の指導や指示に対して、指示通りの動きを児童がしていない場合では、いち早く言葉かけができることが特徴であり、顔と顔の見える安心感から、大きな信頼を得ることができるとも考えられる。一方、児童らは教師の声がよく通る環境のため、指導や指示を聞き漏らすことがなく、集中して体育の授業に取り組んで行くことが考えられる。このことは「安全」という視点として次の項目で後述する。

質問C-③ 専門性の高い単元（水泳や器械運動など）の授業では、安全面での指導及び指示が行き届きやすいと思う。

上記の質問について、対象とした教師のうち4人が「思う」と回答し、1人が「あまり思わない」と回答した。

なお、その選択肢を回答した理由や、そのことがよく表れている授業場面など、思い当たることがあれば記述を依頼し、その内容をまとめて以下に要約した。

合同で実施する体育の授業では、児童を指導する教師の数が多くなる点が挙げられる。このことは、器械運動などの授業で、児童一人ひとりに目がよく行き届くことにつながっている。それは、本校における体育の授業での怪我が少ないことにも表れている。また、少人数で実施する体育は、児童一人あたりが体育器具にふれることができる時間が多いことも挙げられる。などの記述があった。

上記に対する考察として、体育の授業全般についていえることではあるが、特に、水泳や器械運

動などをはじめとする単位では、安全が第一に保証されなければならない。これは、前項の質問である教師の指導や指示に関連することでもあり、児童の行動や理解力を背景として大きく導かれるものであることが考えられる。すなわち、安全という視座に基づいて、小規模校の体育においては禁止事項が的確に伝わりやすいことが特徴であると考えられる。これについては、日常から多くの時間を児童と接していることで、その児童をよく知ることとなり、児童は、どこまでならできるといふ教師による安全についての見方が高まると考えられる。さらに、各々の児童の特性を知ることによって技術的な向上に関して、引き上げて行くことも可能になると考えられる。つまり、それを実践するには、児童との関わりを増やすことで、動きの特性を多く見ていく必要があると考えられる。そして、児童らに挑戦することを促し、教師は支援できる体制を取っておく必要があると考えられる。記述回答からも得られたように、少人数のため、一人あたりの体育器具を使用する時間が多いことは、たくさんの試技ができるという利点があると考えられる。さらに、試技を重ねることで器具などの特性を知りながら技術の完成を目指し、そして、恐怖心などを克服することにもつながると考えられる。つまり、小規模校の体育においては、安全性を背景とするで、心を含めたさまざまな場面での成長が期待されるのではないかと考えられる。三浦ら¹⁵⁾による小規模校における器械運動授業の充実・改善に関する報告では、器械運動の安全面としてのとらえ方を、不安や恐怖感を伴う運動であるため、それを取り除いたり、危険を予測、察知、回避したりするため、お互いに協力したり補助したり、また、器械、器具の点検、整備や決まりを遵守するなど安全に留意する態度の育成も重視されることを述べている。このことから、安全面を通じた充実度をお互い（教師と児童、子ども同士）が高め合いながら、コミュニケーション力を育成して行く体育の授業実践ができると考えられる。

質問C-④ 小規模校の良さ（本校の場合）を活かした体育の授業方法を、ある一部分については都市部の学校でも活用できると思う。

上記の質問について、対象とした教師のうち1人が「多少思う」と回答し、4人が「あまり思わない」と回答した。

なお、その選択肢を回答した理由や、ある一部分を活用できるのであれば記述を依頼し、その内容を以下にまとめて要約した。

子どもたち同士がお互いに教え合い、励まし合うことなど、小規模校で実施されている体育の授業方法は都市部でも活用することができる。また、技術の習得に応じたチーム編成に対するルール上の工夫も行うこともできる。小規模校の良さを都市部の学校で活かすことをできるところもあるが、その場面や状況をよく見極める必要がある。特に、極めて小さな小規模校の方法を都市部で活かして行くことは難しく、むしろ、教師がこれまでの経験（大規模校や都市部）から学んだことを、小規模校の置かれている状況に合わせて教師側がさらに工夫して行くことの方が多い。などの記述があった。

上記に対する考察として、小規模校の良さを活かした体育の授業方法を、そのまま都市部の学校や大規模校ですぐに活かして行くことは実際には難しいのではないかと意見もあるが、玉井¹⁹⁾によれば、都市の学校や教員も学校改革の方向性として、地域との密接に結びついたへき地校の積極面から学んで行くことが多いこと、さらに、学校が家庭や地域に積極的に働きかけて行くためには、学校と学級の小規模化は不可欠であり、小規模校を模範として、教育活動の積極面をとらえることは不可欠であると報告している。回答からは、大規模校からの経験を小規模校なりの状況に応じた工夫をしていくことが挙げられていることから、都市部の学校が小規模校を模範にしていく上においても、多くの小規模校の指導方法においては一律的なものではないことが考えられ、学校と地域などを含めたそれぞれの指導観によった指導方法が考えられる。つまり、都市部や大規模校で活用できる小規模校の良さを活かした体育の授業方法について、基本的に小規模校において良いと考えられている指導方法からその学校に合わせて活用していくことが考えられる。それについては、これまで論じてきたことから、習得状況や技術、体力の違い、レベルに応じた個々の力に合わせた授業を実践する時に大いに役に立つものであると考えられる。集団競技であれば、競技そのものが持っている醍醐味に浸らせることが肝心であり、そこに工夫が求められていると考えられ、小さな体育の授業からでも大きな喜びを味わうことは可能であると考えられる。したがって、小規模校の良さを活かした体育の授業方法とは、小規模校における基本的な指導方法を押さえてから活用する

ことで、学校の形態が異なった場合においても、それを一つのヒントとして、児童生徒の状況、そして学校の規模や地域に応じた体育の授業が実践されて行く必要性が考えられる。

4 まとめ

本研究は小規模校の良さに着目し、それを活かした体育の授業づくりを検討したもので、小規模校の教師の意見や考えを調査することから始めた基礎的研究であった。

教師による体育の基本的な指導観として、遊びと運動は関連性があることが考えられ、楽しく、“からだ”を動かすことで健康や体力を養成して行くことが理想であるが、あくまでも教育の一貫として、「こころとからだ」の成長に努めることも重要であり、仲間を助け、思いやる心、コミュニケーション力も高めて行かねばならないと考えられる。

小規模校の体育授業では、細部に配慮した授業づくりの工夫が求められ、ルールの変更だけではなく、コートやボールのサイズ、ボールの硬さ、大きさ等を見直す必要性もあることが考えられた。差に関する問題は、解消するのではなく、体力や技術の差を活かす方法が考えられ、低学年や女子にもパスを回すなどルール上の工夫を行い、お互いが尊重し合う授業づくりを構築すべきであると考えられる。

小規模校における体育の授業の良さとは、一人ひとりに目がよく行き届くことで、教師が児童とふれ合う機会が多く、きめ細かな指導ができることが利点である。利点を活かすには、小さなゲームとすることで、競技の持つ醍醐味を味合わせ、活躍できる場面を作ることにあると考えられる。また、目が行き届くことで、児童の行動がすばやくなることも挙げられる。それは、少人数のため、教師と児童の双方向の関係が理解力及び行動力の向上につながると考えられ、このことは安全面に関して重要であると考えられる。

小規模校の良さを活かした体育の授業方法を、都市部の学校や大規模校でそのまま活用することは難しい面もあるが、子どもたちの力に応じた授業を実践する際には大いに役に立つ方法であると考えられ、小さな体育の授業からでも大きな喜びや感動を得ることは可能であると考えられる。そして、小規模校の基本的な指導方法を押さえた上で、さらにそれを活用することで、学校の形態が異なった場合においても、それを一つのヒントと

して、児童生徒の状況、そして学校の規模や地域に応じた体育の授業が実践されて行くことが重要であると考えられる。

5 今後の課題

今回の研究から得られた内容を基礎として、島部の小規模校だけに限らず、山間部などの小規模校も対象として研究の確立を行いたい。また、施設や器具があまりそろっていない場合での研究ができていないことから今後の課題としたい。

謝 辞

本研究にご理解を頂きご協力を賜りました、本小学校の先生方に心より御礼を申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 荒木 豊 (1977) 東京都八丈島・末吉小学校の実践に寄せて 現場授業実践の典型. 体育科教育, 25, (5), pp. 68-71.
- 2) 有馬 毅一郎 (2000) へき地・複式教育の研究をどう進めるか. 島根大学教育実践研究, 12, pp. 95-108.
- 3) 藤本 実雄 (1974) 特集・発育発達と生活環境 離島における子供の体格と体力. 体育の科学, 24, (9), pp. 584-589.
- 4) 藤田 勉 小林 稔 廣瀬 勝弘 具志堅 太一 (2009) 離島と都市部の中学校体育における動機づけ関連要因の比較検討. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 特別号, 5, pp. 9-14.
- 5) 深代 千之 (1988) 特集 投げの科学と指導 幼少年期の投げ動作と指導. 体育の科学 38, (2), pp. 86-92.
- 6) 古川 昇 遠山 典江 城後 豊 (1997) 小規模小学校における体育授業の分析の試み. 北海道教育大学紀要 第2部C, 48, (1), pp. 99-111.
- 7) 市川 須美子 浦野 東洋一 小野田 正利 窪田 眞二 他 編集 (2008) 教育小六法〈平成20年版〉. 学陽書房, pp. 362-364.
- 8) 石倉 敏雄 (1996) 現代の教育課題 東京都のへき地教育. 教育じほう, 583, pp. 78-80.
- 9) 伊藤 徳之 岡嶋 恒 清水 真吾 (1997) 北海道における子どもの遊びに関する研究—市部と僻地の比較を中心に—. 僻地教育研究, 51, pp. 85-100.

- 10) 小河 泰史 白石 敏行 (2005) 僻地・複式校における幼・保・小連携への取組 (1) —総合的な学習の時間を通じて人とのかかわる力を育てる—. 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 20, pp. 155-170.
- 11) 丸山 敦夫 晴永 清道 竹下 公博 (2007) 離島複式学級における児童の体格・体力と体育授業の活動量について—1年間の追跡調査から—. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 特別号, 3, pp. 87-95.
- 12) 三浦 裕 本間 智恵子 大石 眞 小林 禎三 他 (2001) 小規模校における子どもの体力の現状と課題—猿払村立知来別小学校を事例として—. へき地教育研究, 56, pp. 19-29.
- 13) 三浦 裕 田畑 直 松田 淳 小林 禎三 他 (1998) 自己教育力を育むサッカー授業の工夫—自ら考え意欲的に取り組む楽しさを味わう体育授業づくり—. 僻地教育研究, 52, pp. 55-70.
- 14) 三浦 裕 谷川 英俊 (1996) 小規模校における地域や学校の特性を生かしたこれからの学校体育—旭川市立富沢小学校における体育授業と体育的行事について—. 僻地教育研究, 50, pp. 85-94.
- 15) 三浦 裕 相蘇 倫朗 (1995) 小規模校における「器械運動」授業の充実・改善. 僻地教育研究, 49, pp. 31-45.
- 16) 宮崎 稔 (2010) 提言 島から日本の教育改革を② 子どもの個性と地域の多様性を活かす教育環境づくりを. しま, 55, (3), pp. 25-29.
- 17) 田原迫 龍磨 (1977) 福岡県におけるへき地学校の実態とその考察. 福岡教育大学紀要, 27, 第4分冊, pp. 1-14.
- 18) 高萩 盾男 (1977) スポーツ時評 遊べない離島の子ども達. 体育科教育, 25, (3), p. 42.
- 19) 玉井 康之 (1996) 北海道のへき地教育の現状と学校・教師の課題. 北海道大学教育学部紀要, 71, pp. 169-179.
- 20) 吉田 安規良 山口 剛史 小林 稔 仲間 正浩 他 (2007) 離島における教育現場の現状報告—離島・へき地教育に関する長崎—鹿児島—琉球, 三大学連携事業による渡嘉敷村での教育事情視察—. 琉球大学教育学部紀要, 70, pp. 237-261.

